

フクシマを忘れるな、全国の学校でフクシマを学ぼう

新しい放射線副読本 ここが問題!!

文科省は、新しい「放射線副読本」“放射線について学ぼう”（小学生用），“放射線について考えよう”（中高校生用）を作成し、今年2月28日に発表、3月3日にはホームページ上に公表しました。そして、4月には全国の小・中・高校に申込み分が送付されました。実物を文科省ホームページで見ることができます。

3.11 フクシマ事故を受けて配布された旧「放射線副読本」（2011年10月14日発表）に対しては、全国から批判が巻き起こり、私たちも撤回を要求して署名、文科省交渉などの運動を行いました。政府の事業仕分けでも「改善」が求められました。その結果、文科省の原発推進部局でもある研究開発局による旧副読本を実質的に撤回させました。

新しい副読本は、運動の成果を反映して初等中等局作成となり、第1章として福島原発事故に関する説明が加えられ、旧副読本にあった放射線の効用の強調はなくなっています。しかし、基本姿勢は、フクシマ事故の深刻さを隠し、原発を運転し事故が起きれば冷静に避難せよ、事故による被ばくは低線量なので心配ないというものです。したがって、全体は、現政権の原子力政策、すなわち原子力を重要なベースロード電源とし原発の早期再稼働を図る、防潮堤と電源車で原発の重大事故に備え、放射能の大量放出も想定して避難計画で対応する、に従うものとなっています。

フクシマを忘れてはなりません。子どもたちは、フクシマ事故の実情を知り、原発と放射能の危険性を学ぶこと、放射能汚染地や避難地で生活や学習を強いられている子どもたちの困難な生活・学習の実態を知ることが必要です。また、未来を担う子どもたちにとってエネルギー問題、地球温暖化防止は深刻な課題です。したがって、温暖化の深刻さ、省エネ・再生可能エネルギーの可能性についても学ばなければなりません。そのために、放射線に関する副読本は原発だけでなくエネルギー問題の全体を知ることができ、フクシマ事故の実態と放射線の危険性も知り、子どもたちの人権を守るような内容で、子どもたち自身で考えることのできるものであるべきです。

旧副読本への批判の結果生まれた新「放射線副読本」ですが、これは原発維持に偏っています。全国の全ての小・中・高校で、家庭で、市民団体に、労働組合で、この新しい「放射線副読本」について検討し、討論を巻き起こしましょう。そして、子どもたちに必要な副読本の内容を考え、学び、教えましょう。文科省に作り直しを求めましょう。

■新しい放射線副読本 ここが問題!!

原発を推進しフクシマ事故を起こしてしまった国の責任が最初に述べられるべきです。4月に閣議決定された「エネルギー基本計画」でも、「まえがき」において、政府及び原子力事業者は「このような悲惨な事故を防ぐことができなかったことへの深い反省を一時たりとも放念してはならない」としていますが、新「副読本」には全く反省がありません。

旧副読本と同様に新副読本は、フクシマ事故以前の電力会社等の重大事故は起きない、起こさないという主張から一転して、重大事故が起きた場合には冷静に避難しようと締めくくられています。「二度とフクシマを繰り返さないため」に知らせるべき原発の危険性や事故の現実には触れず、原発を運転することを前提に、重大事故が起った時にはどう避難するかを教えるのです。つまり、原発を今後も延命させる、再稼働を前提としていることが見えます。

新副読本の批判的検討のために、基本的な問題点をまとめました。

(1) 福島第1原発事故の深刻な実態を隠している

放射性物質の放出量が多く広範囲に及ぶ、最も深刻なレベル7の事故であるとし、東北、関東、中部にいたる広い放射能汚染の地図が掲載されています。事故

の原因・経過については、地震と津波により原発の冷却機能が失われ、水素爆発事故が起こり、放射性物質が大量に放出されたと述べています。

炉心溶融から格納容器破壊寸前であった1~3号機、首都圏にまで及ぶ使用済み核燃料の大量飛散をかる

うじて止めた4号機の事故経過については何も書かれていません。飛散した放射性ヨウ素についての記述もありません。かつて原子力推進の御旗としていた、格納容器、圧力容器などの「5重の壁」があえなくも吹き飛ばされ、突破されたことにも一切触れていないのです。

さらに、事故収束の見込みが立たず、貯蔵汚染水が増え続け、放射能の太平洋への大量放出が続いていること、また、強い余震が来れば再び深刻な事態になる危険性があることについても隠されています。フクシマ事故を引き起こした東京電力と日本政府の責任はどこにも書かれていません。そして結果として、防潮堤と電源車の対策を行い、避難計画を作ることで、原発再稼働をめざす政府と電力会社の政策を擁護するものとなっています。

(2) 放射能放出による深刻な被害を小さく見せる

放射能汚染から逃れるために住民も学校もが避難しなければならなかったことはやや詳しく書かれています。しかし、1600人もの原発事故関連死、放射能汚染地となったために救出できなかった津波の被災者、放置され死んだ家畜たち・ペットたち、正しい事故情報を知らされず被ばくさせられた住民たちのことは無視されています。また、放射能汚染によって、家族や地域社会を破壊され、故郷を失いバラバラにされている人々の痛み、避難生活の深刻さにも触れていません。

「放射線などの健康への影響に不安を感じている人などがたくさんいます。」(小学生版 P4)という表現は、放射線の健康影響は被災者の「不安」に過ぎないと受け取られかねません。

農林水産業、観光業に対する被害については、「『原子力発電所の事故による影響を受けたにちがいない』という思い込みから生じる『風評』によっても、農業や漁業、観光業などに大きな被害がありました」(小学生版 P5)として、風評被害を強調しています。被害というものは現実には存在せず、「風評」に過ぎないのです。

現在も避難生活や高い放射線の中での生活や学習を強いられている子どもたちの体験や意見を多く紹介すべきではないでしょうか。

(3) 本当に必要な復興・再生への対策は書かれていない

福島県の事故後2年間の3つの汚染地図を並べて、

「時間の経過とともに線量が徐々に低下していることがわかります」(中・高校生版 P7)としていますが、これは半減期の短いセシウム134などの減衰や、流出によるもので、今後の線量低下はもっとゆっくりとしか進まないことも知らせなければなりません。また、「食品の安全基準を作った」、「放射性物質に関する検査体制を構築した」、「環境中の放射線モニタリングを行っている」、「除染を行っている」、「生徒たちも復興に取り組んでいる」とし、順調に放射能レベルが下がり復興・帰還が進んでいるかのように述べています。

実際には、現在も14万人が避難生活を強いられ、事故原発から遠く離れた福島市、郡山市のような人口の多い中通り地域でさえ、一般人の立ち入りが禁止されている放射線管理区域よりも放射線レベルの高い中で生活することを人々は強いられているのです。健康で文化的な生活を営む権利は侵害されています。

また、食品の検査結果では100ベクレル/kgという高い基準に基づき超過がないとしています。それでもきのこ、水産物では超過が多く出ています。しかもこれらは出荷されたものだけが対象です。魚介類や農産物の汚染は続いており、食品から放射能を取り込まない対策が今後も重要です。

中・高校生向けの副読本では、「復興・再生に向けた取組」として、除染の結果、福島県の学校の校庭で空間線量が毎時1マイクロシーベルト未満まで低下したことを紹介しています。しかし、毎時1マイクロシーベルトのところでは1年間生活すれば4~5ミリシーベルトも被ばくすることになり、これは一般人の被ばく限度の数倍にもあたります。このような地域では、子どもたちの実際の被ばくを減らすために、保護者や教職員は大変な努力を行っています。

子どもたちの学校での屋外授業での被ばく線量を減らすために、体育館の増設や屋内プールの建設などの対策を急いで進めるべきです。しかし、このような対策については書かれていません。

(4) 放射性物質、放射線、放射能の説明はフクシマ事故から離れている

物理、化学的性質の説明は旧副読本と変わっていませんが、いくらか分かりやすく工夫されています。また、旧副読本で強調されていた放射線の有用性の部分は無くなっています。しかし、相変わらず、エネルギーレベルの非常に高い危険な放射線を光に例えて、「電球に例えると、放射性物質が電球、放射能が光を出す能力、放射線が光といえます」と書いているのは

誤解を生みます。また、放射能の減衰の説明（小学生版 P10）では、半減期の比較的短いものだけが例示され、原発で作り出される半減期の非常に長い危険なプルトニウム、ウラン、ストロンチウムなどは取り上げられていません。

(5) 低線量被ばくの危険性を軽視

まず、フクシマ事故により被ばくが強いられている現状を書くべきです。また、医療被ばくも自然放射線による被ばくと区別して、被ばくを少なくする重要性を述べなければなりません。

高線量被ばくによる急性障害は小学生版には記載が無く、中高校生版では説明図の中だけに「一時的脱毛、不妊、眼水晶体の白濁、造血系の機能低下」との説明はありますが、それ以上の線量で重篤な症状から死へも至るという事実が落とされています。それは、広島・長崎で経験したことであり、また、原発の中には即死するほどに高い放射線を出す部分があるにもかかわらずです。

子どもに対する影響の重大性についても、高線量に限定して、「高線量被曝が原因で将来がんになる可能性は、大人よりも子供の方が高いことが知られています」と子供に対する影響の大きいことを認めています。一方、低線量被曝による影響の度合いが、大人と子供でどれだけ違うかははっきりとはわかっていません（中・高校生版 P12）と記述し、低線量被ばくの子どもへの影響を曖昧にしています。そして、福島事故で被ばくした子どもたちを、将来にわたって見守り健康を管理し医療を補償する必要については何も語っていません。

低線量被ばくの危険については、旧副読本への批判が集中したために、文科省も「新副読本」では記述を後退させました。旧副読本（中学生用）では「短い期間に 100 ミリシーベルト (mSv) 以下の低い放射線量を受けることでがんなどの病気になるかどうかについては明確な証拠はみられていません」と書かれました。「新副読本」中・高校生版では次のように書かれています。「100 ミリシーベルト (mSv) 以下の低い放射線量を受けることで将来がんなどの病気になるかどうかについては、様々な見解があります」（P12）。記述を後退させたものの低線量被ばくに対する対策を行わないという立場は変更されていません。

一方で、「ICRPでは、100mSvを受けたとすると、がんで亡くなる可能性がおよそ0.5%増加する[※]と仮定して放射線防護を考えることにしています。現在

の日本人は、およそ30%の人ががんにより亡くなっていますから、100mSvを受けるとおよそ30.5%のがんで亡くなるという計算になります。」（中・高校生版 P12）と、100mSvの被ばくは軽いかのような書き方です。

しかし、発ガン物質の場合、米国では100万人に1人のガン死増加（0.0001%）が問題にされているのです。このような事実も子どもたちに同時に知らせるべきです。さらに、小学生用には、生まれてから50年間で自然放射能と検査などで、119.5mSv被ばくすることを図で強調し、100ミリシーベルトの被ばくを軽く見せるような表現がなされています。

（注：ICRPは広島・長崎の被ばく線量から求めたガン死のリスクを低線量では2分の1へと低くしている。しかし、最近のデータは0.5%ではなく、1.0%であることを示している。）

(6) 旧版と変わらず、退避や避難で締めくくる

「新副読本」中・高生版は「非常時における放射性物質に対する防護」、「退避や避難の考え方」（P13）と題された文章で締めくくられています。「放射性物質が風に乗って飛んで」来た時には長袖の服やマスクで防ぎ、屋内に退避してやり過ごす。避難は「誤った情報や噂に惑わされず」「落ち着いて行動する」ということです。重要なベースロード電源と位置付けた原発を再度運転し、原発が事故を起こした場合には退避・避難せよという政府の政策にしたがっているように見えます。それが不可能なことはフクシマ事故から明らかです。

小学生版も同様ですが、「時間がたてば放射性物質は地面に落ちるなどして、空気中に含まれる量が少なくなっていく、エアコンなどを使うことができるようになります。このように、事故の影響が収まってくれば、取らなければならない対策も減っていきます。」

（P14）と放射能雲をやり過ごせば大丈夫と言っているようです。第1章の汚染地図の深刻さはここで消しされています。

(7) 原発労働者、核廃棄物の問題には触れず

フクシマ事故を収束させるためにたくさんの労働者が被ばくしながら働いている現実、さらに、原発の運転も、事故処理や廃炉作業も、被ばくしながら働く労働者がいて初めて成立することについては全く書かれていません。

また、「新副読本」も原発が核廃棄物を必ず生み出してしまうという事実には、一切触れていません。このような核廃棄物は何万年の間、安全に管理しなけ

ればならないのです。いわゆる死の灰が詰まった使用済み核燃料の行き場が見つからず、どの原発保有国も処分場探しで行き詰まっています。未来を託す世代にそのような現実を知らせて、原発を使うべきかどうか判断してもらうべきではないでしょうか。新副読本

には全く書かれていませんが、どのようなエネルギーを選び、どのような社会をめざすのか、原発を使うべきかどうか、再生可能エネルギーや省エネ、地球温暖化の問題にどう取り組むべきか、子どもたちに考えてもらうべきではないでしょうか。

■早急に新しい副読本について、批判的検討と討議を巻き起こそう。

**全国の学校でフクシマ事故の真実と被害の実情、原発・放射能とヒバクの危険性を学び、教えよう！！
被ばくしないで生き、学ぶ権利、被ばくしない未来を子どもたちに保障するために活動しよう。**

2013年末、配布希望数を調査しようとした文科省に対し、各地の教育委員会や教職員組合から「内容もわからないのに希望数を調査するとはけしからん」と、抗議の声が上がりました。内容が公表され全国の学校へ配布された現在、早急に、学校、市町村、県、労働組合、家庭、市民団体、あらゆるレベルで、新しい放射線副読本の批判的検討と討議を巻き起こしましょう。問題点を指摘して、学校や教育委員会、文部科学省に副読本の作り直しを申し入れましょう。

一方で、フクシマを学び、教える活動を全国の学校とあらゆる団体・グループ・個人で行いましょう。(2014.5)

緊急討論会（4月29日、大阪）での発言を紹介します。

- * 「新副読本」は原発再稼働の下ごしらえのように見えるが、実際にこの教材で勉強した生徒たちはどう思うだろうか。はじめにフクシマ事故による放射能汚染地図があり、最後に避難せよとある。これを見た生徒は「原発は怖い」と強く印象付けられるのではないかと。案外、使えるかもしれない。
- * 「新副読本」には、重要なキーワードがかけている。「炉心溶融」「帰還困難区域」「放射線の健康影響」「原発事故関連死」「原子力政策と国の責任」「原発労働者」「被ばくしないで生きる権利」である。
- * 生徒たちには、具体的な現実、生の声、体験談などがよい。頭だけで理解させようとしてはいけない。
- * まず、教師が事故の実態、フクシマの現実を勉強しないと教えることはできない。
- * フクシマに対する差別は心の問題ではなく社会的な問題だ。道徳では解決できない。

新副読本は、以下の文科省のホームページから取り出すことができます。

小学生版 http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2014/03/03/1344729_1_1.pdf

中・高生版 http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2014/03/03/1344729_2_1.pdf

パワーポイント教材（CD版）
「先生と子どもたちと一緒にフクシマの原発事故を考えよう」
冊子版もあります。下記、前田までご連絡ください。500円です。

連絡先:

(若狭連帯行動ネットワーク) 前田由隆: 〒562-0013 大阪府箕面市坊島4-14-12 TEL&FAX 072-721-2956

Eメール nncs-m@wonder.ocn.ne.jp

(地球救出アクション '97) 稲岡美奈子: 〒580-0003 松原市一津屋4-9-6 TEL 072-336-7201 FAX 072-339-2871

Eメール minako-i@estate.ocn.ne.jp